

「小学校における「がん教育」講演会実施の試み」

白石貴裕 1) 福永雅史 1) 下川希世 1) 園田恵菜 1) 山下力 1) 筑紫聡 1)
下川隆志 1) 野田千里 1) 山下尚子 1) 岡田幸二 1) 三善優 1)

1) 株式会社 ユネット 清風薬局

【目的】2017年度中学校の学習指導要領に「がんについても取り扱う」と明記された。これは1998年のエイズ以来のことである。次の学習指導要領に全面移行される2021年度から、全国の中学校でがんの授業が実施される予定である。このような時代の流れを受けて小学校養護教諭から「がん教育」講演会開催の依頼があった。現在、学校薬剤師としてゲートウェイ・ドラッグとしての飲酒・喫煙の害を「薬物乱用防止講演会」で年1回実施している。これと関連付けて養護教諭、学年主任と連携して「がん教育」講演会を試みたので報告する。

【方法】(1) 期間：2017年11月2日(木)5校時(14:15~15:00) (2) 場所：音楽室 (3) 対象：あさぎり町立免田小学校6年生59名 (4) 養護教諭によるオープニング (5) 文部科学省作成の映像教材1「がん博士の「がんについての基礎知識」(6分35秒) 視聴による学習後、専用ワークシートに記入 (6) 同映像教材2「がんと生きる」エピソード1：がん経験者男性(5分24秒) 視聴後、学校薬剤師による講話 (7) 児童アンケート記入 (8) 学年主任によるクロージング

【結果】(1) がん教育の内容はよく理解できた34%(20/59)、理解できた41%(24/59)、合計75%(44/59) (2) 今回の授業はとても役に立つと思う75%(44/59)、まあ役に立つと思う25%(15/59)、合計100%(59/59) (3) 今回の授業内容を家族・友人・周りの人に話そうと思う86%(51/59)

【考察】今講演を行うに当たり「遺伝子」と言う言葉を使用して児童が理解できるかどうか学年主任と意見の相違があり、最初は使用しなかつてもりであったが、「がん」の本質を伝えるために最終的に使用した。結果75%の児童が内容を理解できていたので、「がん」や「遺伝子」と言う言葉は児童にとって身近なものであることが分かった。翌月に行った「薬物乱用防止講演会」で、飲酒や喫煙の害をより具体的に理解できたのではないかと思う。二つの講演会を連続して行うことが、セルフメディケーションの早期教育と言う観点からも有用であると考えられる。また、薬剤師が「がん」の話をするというのは児童にとっても意外だったらしく、薬剤師と言う職業に興味を持つとともに、薬剤師の認知度を上げて社会的地位を向上させるのにこのような活動は必要であると思う。

【キーワード】「がん教育」「学校薬剤師」「セルフメディケーション」